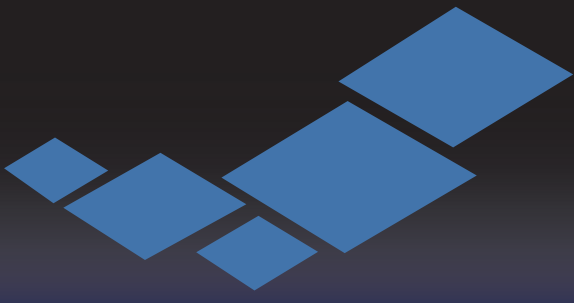




| | |
|------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 月刊DRF 第35号 |
| Author(s) | デジタルリポジトリ連合 |
| Issue Date | 2012-12-03 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/73585 |
| Type | periodical |
| Note | 事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの |
| File Information | DRFmonthly_35.pdf |



[Instructions for use](#)



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第 35 号

No. 35 December 2012

【大特集】 第 9 回 デジタルリポジトリ連合ワークショップ (DRF9)

【特集】 第 5 回 SPARC Japan セミナー 2012

大特集！！ DRF9

< 学術雑誌の変貌：フィンチレポート、新 BOAI イニシャチブ、英国新事情 >
各セッション概要 / DRF9 総括 / ポスターセッション報告 / Dominic Tate 氏のコメント

11 月 21 日に第 9 回デジタルリポジトリ連合ワークショップを開催しました。2012 年はオープンアクセスが急展開した年。激動の英国からゲストを招き、白熱した議論が行われた第 2 セッションには特に注目です。

このほか、「壁」があつという間になくなったポスターセッション等、盛りだくさんの DRF9 についてたっぷりお伝えします！



第9回 デジタルリポジトリ連合ワークショップ (DRF9)

① 各セッション概要

第1セッション

イントロダクション：海外情勢解説 国内事例報告

日 本ならびに世界における機関リポジトリ (IR) とオープンアクセス (OA) の動向について取り上げられました。BOAI (Budapest Open Access Initiative) 提唱より10年、国内ではDRFをはじめとしたIRコミュニティの普及活動が実を結び、OAが躍進することになりました。

国内の状況については、DRF参加機関より、研究室訪問や広報CM作成等の事例が報告され、IRは機関の担うべき重要な役割の一つとして、“ひたひた”と定着しつつあることを実感することができました。

その一方でOAの今後10年を見据えた“BOAI10”、リポジトリの相互運用性に触れた“OR2012” (Open Repositories 2012)、ゴールドOAを推奨する“Finch Report”といった海外の動向に関する話題提供があり、IRやOAをめぐる状況は、国際的に新たな局面を迎えているようです。国内のみならず、世界の動向を視野に入れた取り組みを行う必要性を再認識しました。

<大園 岳雄 (香川大)>

DRF9 HP :

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?>

DRF9

第2セッション

激動する学術コミュニケーション ：最前線の英国から

U KCoRR*1のDominic Tate氏を招き、英国におけるOAの現在についてご講演頂きました。フィンチレポートについては、政府がOA推進を決定したことは評価できるとしつつ、ゴールドOAへの傾斜に伴うコストの問題、海外文献への対応の問題について懸念が示されました。特に前者は、購読費とOA出版費用 (APC) の双方の負担により総コストは上がっていること、RCUK*2からの研究資金の一部がAPC用に振り分けられたことで研究費減少の可能性があること、全てゴールドOAになった場合の国全体のコストがいくらになるのか検討する必要があること*3が指摘されました。

OAアドボカシーについてはプロモーション等と同義で、文化的変化のプロセスを実効性のあるものにするために行うものと定義付けた上で、以下のことが指摘されました：(1)OAポリシーを制定すれば広報活動をしなくて済むようになるわけではない。ただポリシーは遵守責任を生じさせる等、OA推進のための便利な手段ではある、(2)「抵抗感を持つ人」と「反対する人」は区別すべきである。反対する人はなにか理由があって反対しているので対処しやすいが、抵抗感を持っている人に対しては、じっくりと話し合っていくことが必要である、(3)周到な準備こそが成功への鍵である。

<西菌 由依 (鹿児島大)>



第3セッション

頼れるリポジトリ運営のかたちとは ：日英の共同・共用リポジトリ

頼 れるリポジトリ運営として日英両国の共用リポジトリの事例を紹介して頂きました。

日本の公私立大学のIR構築率は30%未満となっています。地域共同リポジトリ、共用リポジトリはこれらのインフラとなることが期待されており、前者は92機関、後者は79機関が参加と数字の上からも、インフラとしての存在を確立しつつあります。今後の課題としては、地域共同リポジトリの運営を持続的に行っていくかどうかが挙げられ、地域のコミュニティを運営母体にする等、持続可能なモデル例が示されました。

一方、日本の地域共同リポジトリのモデルとなった英国ですが、現在も運用している共用リポジトリはWhite-Rose1つだけしか残っていないとのことです。その理由は英国の機関は独自管理したがる傾向があり、例えば、SHERPA-LEAPという共同リポジトリプロジェクトは終了後に共同体制を維持するか、独立するかを選択できたのですが、全ての機関が独立を選択したとのことです。日本においても今後出てくる課題かもしれない、興味深い事例を報告頂きました。

<大園 隼彦 (岡山大)>

*1 United Kingdom Council of Research Repositories

*2 英国研究会議

*3 機関のシミュレーションツールがある

第9回 デジタルリポジトリ連合ワークショップ (DRF9)

② 総括！！ DRF9 / ポスターセッション

総括！！ DRF9



第9回ワークショップでは、「**学術雑誌の変貌：フィンチレポート、新BOAI イニシヤチブ、英国最新事情**」という総合タイトルを設けました。前回の「メガジャーナル」に続き、機関リポジトリ担当者の集会の主要テーマがなんで雑誌なのだ、いぶかしむ向きもあろうかと思えます。しかし、昨今のOAジャーナルの勢いはほんとうに無視できないものがあります。

私が機関リポジトリの仕事に関わりを持ったのは平成16～17年頃のことでした。ちょうどその頃、「著者負担モデル」という言葉が聞かれはじめ、選択OAオプションを採用する出版社が増えつつありました。通常の有料電子ジャーナルにおいて、「私の論文はOAで公開したい」と申し出た著者が所定の料金を払うことで、その論文だけアクセス制限が外れて契約機関外からもアクセスできるようになるというものです。その料金は、どこの出版社でもだいたい3,000ドル前後でした。

論文採択が決まって掲載自体は確定したのに、それだけでなく別に30万円も払ってまで、自分の論文をOAにしたいという研究者が本当にいるのだろうか。そんなやり方がうまくいくはずがない。まして、全面的にOAのジャーナル、つ

まり、著者が負担する料金だけでやっていく学術雑誌なんてものがどうして可能なものか——そう感じたものです。

しかし、この2～3年間のPLoS ONEの大成功を嚆矢とし、OAジャーナルの持続可能性、いや、有望性が、あっという間に学術出版業界に広がりました。機関リポジトリの構築・運営は、大学図書館活動のどちらかといえば周縁的な位置によく地歩を占めたところでは。その一方で、現在、OA思潮は、学術雑誌の供用という、大学図書館機能の伝統的中枢を穿ちはじめています。

2002年にOAの二大戦略（セルフアーカイブとOAジャーナル）を提唱したBOAIは10年目の今年、新たに、具体的かつ詳細な今後の推奨シナリオを示しました。OAと言えば「ああ、それはキカンリポジトリ担当者のシゴトだ」という時代はもう終わりです。図書館全体でこの情勢変化を感じ取り、自らを改造していかなければなりません。

今回のワークショップでは、そのような願いも込めて、できるだけ雑誌担当の方々とも議論を共有したいと考え、頭書のような総合タイトルをつけました。フィンチレポートをきっかけに激動している英国の学術コミュニケーション情勢、そんな中での機関リポジトリ運営の状況（研究者の方々との対話の様子など、こちら日本での状況とまったく瓜二つで痛快かつ感動的でした！）、くわえて、我が国のリポジトリ構築活動の好事例が交差した、実りある会となったと感じています。ご参加くださったみなさま、どうもありがとうございました。

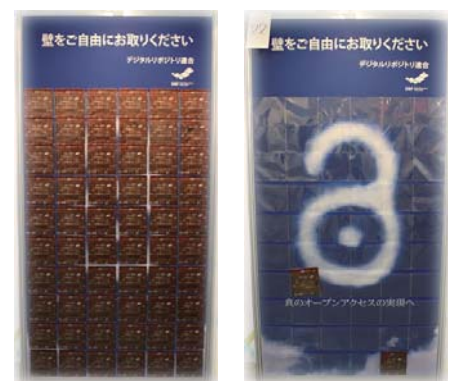
<杉田茂樹（小樽商科大）>

DRF、図書館総合展ポスターセッションに出展！



オープンアクセスをめぐる言説で「壁」は紋切り型のメタファですが、今回はそれを視覚化し、ポスターのおおかた全面を赤煉瓦の壁で覆ってみました。壁の断片がその解説とDRFの紹介をしたためた配布用リーフレットになっていて、来場者が手に取るごとに壁が削り取られていくという趣向。手間がかかった割りには、ありがたいことに次々とリーフレットは抜き取られ、早々に壁は消失、初日からあっさりオープンアクセス実現の青空が明るみに。予想外の展開に面食りましたが、案外これがオープンアクセスの次なる10年を暗示しているのかもしれないなどと、勝手に結論に導いて帰路につき、立ち寄った土産物屋で横浜名物の赤煉瓦を模した洋菓子をみるにつけ、どっと旅の疲れがでたのでした。

<永井一樹（兵庫教育大）>



Before

After！！

第9回 デジタルリポジトリ連合ワークショップ (DRF9)

③ Dominic Tate 氏のコメント全文と超訳

It was a great privilege and an honour to be invited to participate in the DRF9 conference, which took place at the Pacifico conference centre in Yokohama, Japan on Wednesday November 21st 2012.

I had been invited attend to give presentations in two different capacities – firstly in my capacity as External Liaison Officer for UKCoRR. Secondly, the DRF was interested in my practical experiences of working as a Repository Manager in a British university.

The day before the formal DRF9 conference, I met with several members of the DRF committee to run through presentations and to carry out the final preparations for the next day's meeting. I very much enjoyed learning about what Japanese repository managers have been doing in the way of promotional activities for their repositories. I was particularly impressed by many of the repository-branded marketing and promotional items I was shown, including umbrellas, drinks holders and stationery. This is one area where British repository managers could learn from their Japanese counterparts and I will be taking some examples of these materials back to the UK to show my British colleagues! After this meeting I was (very generously) treated to dinner by many DRF committee members at an excellent restaurant specialising in seafood.

On the day of the DRF9 meeting, the audience were briefed on the Finch Report, about which there has been much interest in Japan over the last couple of months. I was asked to present UKCoRR's response to the Finch Report and then to take part in a discussion about models in open access with Prof. Syun Tutiya, of the National Institution for Academic Degrees and University Evaluation.

In this part of the session I explained that the reaction to the Finch Report had been mixed, amongst the UK repository community. Although we welcomed the fundamental support for open access, there was concern about the high costs of moving to 'gold' open access in the short term, as well as the possibility of 'double dipping', (whereby universities pay open access article processing charges – APCs – as well as having to cover subscription costs). Another concern was the international context, as UK universities would still have to pay subscriptions to access content written abroad. The discussion with Professor Tutiya was very interesting, although because of the healthy discussion, the session did over-run for a good 15 minutes!

In the next part of the session I was asked to present on some best practice relating to the open access advocacy activities undertaken by repository managers in the UK. I explained that over recent years, a number of different approaches have been tried, but the general feeling is that scheduled meetings with individual academics tend to have the most successful outcomes for repository managers. There are a number of reasons for this. Firstly, these meetings allow you to build relationships with academics and understand their motivations and priorities. Secondly, you create an environment whereby academics are more comfortable asking questions and raising objections. Repository managers have to be able to elicit objections in order to be able to handle them using evidence and opinion.

From my point of view, it was very interesting to see that the list of common objections prepared by the UK's Repositories Support Project (RSP) was very familiar to the Japanese repository managers. It seemed very obvious that both UK and Japanese repository managers deal with precisely the same problems on a daily basis, and that we could do a lot to help each other by working in partnership. To this end, UKCoRR would like to do more to build on its special relationship with DRF over the next year, to see what partnerships and exchanges of knowledge can be developed to support repository managers in both countries.

The final session of the day provided progress reports and discussion on a number of consortial repositories in Japan, and I was asked to provide a brief overview of the situation in the UK. This strikes me as another approach where the UK could learn from the Japanese culture of shared services, and I expect that the lure of potential savings of cost and effort may see more consortial repositories in the UK in the future.

Discussions about building international relations and sharing expertise continued over drinks and dinner where all the attendees participated in a fun quiz testing knowledge on a range of subjects ranging from open access to Japanese football players in the UK premier league (Shinji Kagawa). It was great to be a part of this dinner and I was particularly impressed by the way in which Japanese colleagues work (and play) together – I suppose, much like we do in the UK.

I will always have very fond memories of my first trip to Japan and the warmth with I was welcomed. I am very much looking forward to developing relationships further between UKCoRR and the DRF, and for the moment, all that remains is for me to thank the DRF for their superb hospitality.

Dominic Tate 氏より DRF9 終了後にメッセージを頂きました！！
長文なので、エッセンスを詰め込んだ超訳をどうぞ！！

UKCoRR の渉外担当者、英国の大学におけるリポジトリ実務経験者、この2つの立場で招いて頂きました。

フィンチレポートには、短期間でゴールド OA 移行にかかる高額のコスト、海外文献の購読費支払い継続といった懸念があります。

OA アドボカシーで最も効果的なのは個々の研究者とのミーティング。研究者との関係構築、モチベーションや優先事項の理解ができ、研究者も質問や反対意見を述べやすいからです。

よくある反対意見が日英共通であるのはすなわち、両国で日々同じ問題を抱えており、連携して助けあえるということ。UKCoRR は今後 DRF とさらに連携し、両国のリポジトリ担当者支援のためにどのような連携や知識の交換が展開できるか考えてみたいです。

日本のリポジトリブランドの広報グッズや、共有サービスという文化が参考になりました。おもてなしありがとうございます。

<超訳：西蘭 由依（鹿児島大）>

第9回 デジタルリポジトリ連合ワークショップ (DRF9)

④ 技術ワーキンググループポスターセッション



OAI - PMH



junii2

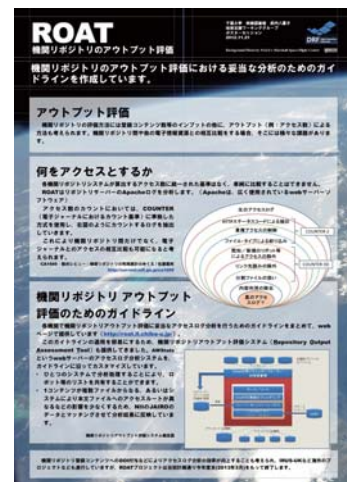


DOI / Handle



著者識別子

D RF9会場で技術サポートWGのポスターセッションを開催しました。技術サポートWGメンバーが新任担当者研修等の講師を担当した際に、改めて確認したほうが良いと思ったテーマに加えて、CSIのプロジェクトや、海外の先進的な事例の報告等を取り上げました。ポスターデータはDRF Wikiで公開しています。わかりやすい解説を心がけていますので是非ご覧ください。
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?tech/> 関連技術情報



ROAT



AIRway



SUSHI



Open Repositories 2012

第5回 SPARC Japan セミナー 2012 Open Access Week

日本におけるオープンアクセス、この10年これからの10年 —その1—

本セミナーでは出版社、研究者、図書館のそれぞれの立場から今後の OA についての考えが示されました。出版社はビジネスモデルの整っているゴールド OA を推進し、研究者は論文の質が保障される OA システムに期待しています。そして図書館は機関リポジトリをインフラとした OA 推進の継続を第一に考えています。以下、それぞれの考えを概説します。

出版社

物理学分野においても
ゴールド OA は支持される

arXiv がほぼ網羅的であるのは物理学の中の高エネルギー物理学分野に限られており、すべての論文が arXiv で利用できるわけではない。そして AIP のゴールド OA 誌である AIP Advances は出版後、順調にシェアを伸ばしており、物理学分野においてもゴールド OA が支持されることを示している。OA を考える上ではビジネスモデルが重要であり、著者・購読者・カレントファイル・バックファイル等のどこに課金をすべきか、学術誌の特性に合ったモデルを考慮する必要がある。

OA の進展には利害関係者の協力が不可欠

欧米の状況に目を向けると、米国では政府助成団体と出版社が協調してデータの相互運用性の向上に注力している。“FundRef”^{*1} では研究助成団体と成果論文の結びつけを進める他、助成団体への報告書や研究データと成果論文を結びつけるプロジェクトも進んでいる。英国の Finch レポートではビジネスモデルが整っているゴールド OA やハイブリッド OA モデルの支持が表明され、英国政府は APC のための 1000 万ポンドの支援策を打ち出している。

OA は現在成長しているが分野によりその進展は多様である。今後も成長するかは未知であり、進展させるには政府助成団体の協力が不可欠だろう。

John Haynes 氏 (AIP Publishing)

研究者

論文の質を維持できる持続
可能な OA モデルを

研究者には様々な立場があり、OA に対する評価も様々である。例えば著者や読者としては OA による流通拡大は賛成であるが、編集者としては OA 化による学術誌の質の低下や OA 誌のメガジャーナル化や OA 義務化による学術誌の多様性の消失についての懸念がある。OA 誌の進展が質の向上につながる保証はなく、様々な利害関係者を考慮した持続可能な OA モデルを構築する必要がある。

植田 憲一 先生 (電気通信大学)

日本発の国際 OA 誌による
情報発信を目指す

高エネルギー分野の研究成果は国際的な共著が多く、ほとんどが海外の論文誌へ投稿されている。日本では新たに SCOAP³^{*2} の枠組みの中で PTEP^{*3} を創刊し、日本発の国際 OA 誌による情報発信を目指している。

野崎 光昭 先生
(高エネルギー加速器研究機構)

Social 評価を取り入れた
オープンサイエンスへ

生物科学分野で OA が盛んな理由は OA 誌に IF の高い雑誌が多いこと、OA 誌は査読が通りやすいこと等が考えられる。これからは情報量の急増の結果、データを囲い込むコストが高くなることが想定される。今後は Social な Web の評価を取り入れたオープンサイエンスに移行する必要があるだろう。

有田 正規 先生 (東京大学)

図書館

機関リポジトリを OA のイン
フラとして活用する

「学術情報の国際発信・流通力強化に向けた基盤整備の充実について」等、国内外の様々な報告書が OA におけるリポジトリの存在について触れている。今後も国際的な連携に力を入れ、IR の活動をさらに充実させる必要があるだろう。そして、学術論文以外のコンテンツ、例えば研究データのオープンデータ化等の方向性も模索する等、機関リポジトリを OA のインフラとして活用する努力を続けるべきである。

栗山 正光 先生 (常磐大学)

宇陀 則彦 先生 (筑波大学)

大園 隼彦 さん (岡山大学附属図書館)

城 恭子 さん (北海道大学附属図書館)

当日の資料は SPARC Japan セミナーの HP でご利用頂けます。

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2012/20121026.html>

*1 CrossRef が進める学術出版社と助成団体による共同プロジェクト

<http://www.crossref.org/fundref/index.html>

*2 Sponsoring Consortium for Open Access Publishing in Particle Physics

欧州原子核研究機関 (CERN) の推進する高エネルギー物理学分野のオープン・アクセスプロジェクト

*3 Progress of Theoretical and Experimental Physics

第5回 SPARC Japan セミナー 2012 Open Access Week

日本におけるオープンアクセス、この10年これからの10年 —その2—

セミナー終了後、当日講演をされた東京大学大学院理学系研究科生物学専攻・有田正規先生、電気通信大学レーザー新世代研究センター・植田憲一先生、北海道大学附属図書館・城恭子さんに当日の感想、講演の補足や図書館への提言等についてコメントを頂きました。

究 極の選択を考えよう。ゴールド OA が一社独占体制になり利益率が年間 50% になる状態と、グリーン OA が完備されるがサーバー経費が高み、書籍もスタッフも無い PC 端末だけの図書館になる状態。どちらの結末も、今の図書館が不要とされることに変わりない。

10 年前は OA が目標だったかもしれない。しかし今 OA は当然の成行きである。OA 化に努力する必要はない。考えるべきことは他にある。質の低い OA 雑誌をどう扱うか。商業出版が儲けすぎても良いのか。IR の検索を Google に頼って良いのか。何より、知識の門番としての図書館はどう生き残るのか。お祭りをしている場合ではありませんよ。

研 究者の立場を代表して意見を述べるのは、きわめて困難である。私という一人の研究者の中でも、①著者、②読者、③レフリー、④エディター、⑤編集長、⑥海外、国内の学会理事、⑦学術会議、IUPAP メンバーなど多面的な顔を持つ。そして、立場によって OA 化による利害が衝突する。学術出版における“著者負担と購読料、さらに論文の質の保存則”についても言及し、OA 化は見かけの質の向上には寄与するが、研究の質の向上を保証するものではないことも指摘した。

我々は“あるべき研究者”と激しい競争の中で生き残りをはかる“現実の研究者”の狭間で揺れ動く存在である。同時に、科学の神髄は激しい競争の中で、最終的には正しいものが生き残り、人類の知識として定着するところにある。個別の局面における研究者のエゴや過ちを凌駕する学術活動の普遍性を保証しているのは、研究者が自己利益を超えて行う Peer-Review である。それを支えているのが研究者コミュニティであることも”忘れられがちな事実”として強調した。

出 版社、研究者、図書館、研究助成機関それぞれの立場から見たオープンアクセスが語られ、パネルディスカッションではフロアも交えて、たいへん盛り上がりしました。

自然科学系の研究者 3 名からのご発表では、学術分野間の意見の違いは勿論、同じ分野の研究者でも人によって様々であり、さらに一個人でも立場によってオープンアクセスの意味が異なってくるのが強調され、興味深く感じました。特に、有田先生の「みんなが面白いと思うものが残る」という言葉が印象に残っています。オープンアクセスを巡る状況は、これからも刻々と変わっていくのでしょうか。図書館もその潮流の中に入って、対話を続けていくしかないのだ、と改めて感じました。

また、研究室訪問に行かなくちゃ！



東京大学大学院理学系研究科
生物化学専攻
有田 正規 先生



電気通信大学
レーザー新世代研究センター
植田 憲一 先生



北海道大学附属図書館
城 恭子 さん

第5回 SPARC Japan セミナー 2012 @ 国立情報学研究所 2012年10月26日開催

<写真提供: NII>

DRF、KISTI*1 と交流



*1 Korea Institute of Science and Technology Information

11 月 15 日、国立情報学研究所を韓国の KISTI の方が訪問され、韓国の IR や DRF の活動について情報交換を行いました。KISTI からは、上級研究員の Hwang Hyekyong さん、Mihwan Hyun さん他通訳の方を含めて 5 名が、DRF からは筑波大学の内島と真中が参加しました。

韓国のリポジトリは政府主導と機関独自のプロジェクトに大別され、政府主導のものでは、KISTI による研究機関を中心とする IR プロジェクトと KERIS による大学の学位論文保存を主目的とするプロジェクトの 2 つがあるとのことでした。

KISTI のオープンアクセスプロジェク

トは OAK (Open Access Korea) と呼ばれ、OAK Portal、OAK Repository、OAK Central の 3 つから構成されています。Portal はハーベスタ、Repository は研究機関の IR、そして Central は OA Journal のプラットフォームです。

IR に関する悩みはどこも同じようで、韓国でも研究者のオープンアクセスやセルフアーカイブに対する関心が低く、どのように研究者を引き付けるか、苦労しているとのことでした。

アジアでの情報交換も有益であり、情報交換や交流ができないか、やや突っ込んだ提案も DRF 側から行いました。

<内島秀樹 (筑波大学)>

イベントのご案内

①機関リポジトリ担当者のための著作権ワークショップ ーポスト CSI を目指した SCPJ 活用術ー

平成 24 年 12 月 13 日 (木) @大阪大学
プログラム(13:00-17:00)

S CPJ プロジェクトの 4 大学が主催するこのワークショップでは、SCPJ が有するオープンアクセス上の意義を ILL 統計やダウンロード統計などを踏まえて確認し、国立情報学研究所の CSI 事業終了後のオープンアクセス戦略を共有することをテーマとします。リポジトリ担当者の実務のために、オープンアクセスを含めた観点から事例紹介や討議も行います。

多くの方の参加をお待ちしています。

http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/pub/SCPJ_WS/

1. ポストCSIにおけるSCPJ活用戦略と日本のOA
日本大学文理学部教育学科 准教授 小山憲司
2. 機関リポジトリと著作権概論
大学図書館IR担当者
3. 機関リポジトリと著作権実務ー国内誌を中心に
大学図書館IR担当者
4. 事例と討議(SCPJによるOA戦略について)
日本大学文理学部教育学科 准教授 小山憲司
大学図書館IR担当者

②DRF 地域ワークショップ (東北地区)

DRF - Fukushima

こ のワークショップでは、リポジトリ導入後数年経過した機関の方からリポジトリ導入を検討中の機関の方まで幅広くご参加いただけるよう、3つのテーマを設けました。

1. リポジトリに対する研究者の評価
2. リポジトリの導入事例
3. 研究成果の収集

テーマ 1・3 はどの機関にとっても継続していく課題であり、テーマ 2 はリポジトリ導入を検討中の機関にとってそれぞれのシステムの事例を知る機会となります。多くの方のご参加をお待ちしております。

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF-Fukushima>

平成 24 年 12 月 21 日 (金) @ 福島大学
プログラム

- 13:30-14:30 【講演】研究者から見たリポジトリ
日本大学文理学部教育学科 准教授 小山憲司
- 14:30-15:00 【事例発表 1】リポジトリ導入事例
【DSpace】 福島県立医科大学 西戸雅博
【XooNips】 青森県立保健大学 山田奈々
【JAIR Cloud】 神戸松蔭女子学院大学 加川みどり
- 15:00-15:15 【事例発表 2】リポジトリ原則登録のルールづくり
名古屋工業大学 林和宏
- 15:30-16:40 【分科会】

【次号予告】 12 月 増刊号 DRF 10 大ニュース



Facebook はじめました。

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊 DRF 読者アンケート受付中！！

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

月刊 DRF : <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf>